



竜の冬 / *Dragon Winter* (1978) / ニール・ハンコック(中村妙子訳) / 早川書房 (文庫・10/31刊・¥440)

誰の絵だったか、動物たちを描いた絵を思い出す。その動物たちは、姿形こそリスやアライグマなのだが、食事をしたり、話し合つたりする絵のありさまは、人間の生活をそのまま映している……。

『かもめのジョナサン』や『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』以来、動物寓話(動物文学ではない)とでも言える、この類いの作品が目立つようになつた。寓話と名づけられるのは、その物語が大人向けのメッセージを内包することが多いからだ。

さて、本編もまたそんなお話である。平和な動物たちの村に、長い伝説の冬、△竜の冬△の噂がたちこめる。北の果てにしかいないはずの殺し屋狼が村に出没し、人間たちの姿さえ見ることができた。すべてが前兆だった。彼らは、偉大な先祖ハイ・クランの助言で、遠い滝までの旅に出る。

著者ニール・ハンコックは、無理な寓意を押しつけない。起伏に富んだ筋立てと、動物たちの個性で、大人の童話を創っているからだ。ただし、これが単なる、小動物たちの冒険物語であるとすると、どこか中途半端な印象が残ってしまうのだけれども。(俊)